

青梅市文化財ニュース

第356号

平成29年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市立第七小学校

この文化財ニュースでは今まで、市立第六小学校まで紹介してきました。これからご紹介する市立第七小学校は、旧小曾木村の学校です。この学校も第四小学校と同じで、正式名称で呼ばれることはほとんどないようです。通常は「ななしょう」と呼ばれていますが、「青梅市立第七（しち）小学校」というのが正しい名称です。

今まで何回もこの紙面で書いてきましたが、小曾木村が誕生したのは明治22（1889）年の市制町村制が施行されたことによるもので、「……一般ノ人民必ス邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメンコトヲ期ス、……」という「学制」が發布された明治5（1872）年8月2日時点では小曾木村ではなく、黒沢村、南小曾木村・富岡村というだいたい今の町名に当たる3つの村々でした（黒沢川に沿った細長い地域）。したがって、学制が發布されたことによりできた学校は、明治6年5月に黒沢村に「玄溪学舎」（聞修院）が、同年12月に南小曾木村に「小曾木学舎」（高德寺）が、同年6月に富岡村に「富岡学舎」（常秀院）が設立されたのがその始まりです。黒沢村・富岡村に遅れること半年の後に「小曾木学舎」ができたのには、南小曾木村の複雑な事情が絡んでいるのではないかとということが「小曾木近代史」に書かれています。「あくまでも推論であるが、」とことわりがつけてありますが、南小曾木村は明治維新の時に「川越藩」「岩槻藩」の二つの藩が治めており、一つの村ではあるが、あたかも2つの村が存在するような様相になっていて、村政を一本化するのに時間がかかったためではないかと推察しています。そして、高德寺の「小曾木学舎」の支校ということで荒田の福昌寺（現七小の西隣）にも学校を設立しています。

こうして、小曾木地区の3ヶ村にもお寺を間借りするという状況ながら、それぞれ学校が作られ、子どもたちの勉強が始まりました。しかしながら4～5年で変化が現れてきます。それは、明治12（1879）年9月に「教育令」が出されたことによるようです。同年7月に、南小曾木村の学校と富岡村の学校を合併しようということで伺い書が出され、明治13（1880）年12月に「博文学校」が開校しています。（ただし、学校はそのまま、相変わらずお寺を間借りしている状況であった。）

明治11（1878）年に「郡区町村編成法」という法律ができたため、明治17（1

884)年に「上成木下分外七ヶ村」という連合村ができて、小曾木にある三ヶ村もこの連合村に加盟して成木の村々と一緒に活動するようになりました。そして、連合村では、各村ごとに負担金を決めて合同で、学校運営を行おうとしましたが、黒沢村だけがこれに同意せず、独自で学校運営を行ったりと、なかなか1枚岩とはいかず、わずか2年ほどで、学校予算に関しては各村での負担となっていたようです。

明治21(1888)年4月21日、博文学校の支校となっていた「富岡学舎」は独立して富岡村愛宕神社の隣接地に間借りではなく、小曾木地区で最初に独立した新校舎の「富岡学校」を開校させました。そして、翌22(1889)年には「上成木下分外七ヶ村」という連合村の時代も終わり、新しい町村制のもと現在の第七小学校の学区に当たる「小曾木村」が誕生します。山間地に位置するため谷筋が違ふと何かと交通が不便です。黒沢川に沿った黒沢村・南小曾木村・富岡村が一つになり「小曾木村」となって以後、青梅市と合併するまで、一つの行政単位として活動していきます。(この明治22年には青梅町・調布村・霞村・吉野村・三田村・成木村も誕生しています。)

新しく小曾木村が誕生し、行政の仕組みや会計が変わったといっても、すぐにいろいろなことが変わるわけではありません。やはり時間とお金が必要になってきます。5年後の明治27(1894)年8月黒沢に新校舎が完成し(明治37(1904)年分校の統廃合が実施されるまで西分校があった場所)、聞修院の間借りから独立した校舎へと引越しをしたのです。

また、旧南小曾木村の「博文学校」も新校舎を建築(現在のJ A西東京小曾木支店の所)し、明治40(1907)年3月31日に開校式を行い、高德寺の間借りから独立した新校舎へと移りました。

こうして、それぞれの学校も独立した校舎を持ち、学校制度の変更による修学年数の増加に伴って児童数も増え、増改築を余儀なくされていきましたが、あいにく黒沢川流域には高等小学校は開かれていませんでした。そのため、向学の志ある者は、峠を越えて青梅や成木の学校へ通いました。そこで、高等科設置の議案が村議会にかけられたのは明治45(1912)年4月になってからで、大正2(1913)年4月になってやっとのことで小曾木地区にも高等科が博文小学校に設置されたのでした。

さらに、大正8(1919)年に、旧南小曾木村の「博文尋常高等小学校」が「小曾木尋常高等小学校」へ、「富岡尋常小学校」が「小曾木東部尋常小学校」へ、「黒沢尋常小学校」が「小曾木西部尋常小学校」へと名称が変わりました。その7年後の大正15(1926)年になってこの3校を統合することになり、今の第七小学校の原型となる「小曾木尋常高等小学校」が誕生しました。そして、翌昭和2(1927)年11月に小曾木村「荒田」の現七小の所に新校舎が完成し、東西の尋常小学校もそれぞれ「東分教場」・「西分教場」として、同じ教育課程で授業が行われるようになりました。小曾木尋常高等小学校の

新校舎はそれは見事なもので、「小曾木の村に過ぎたるものは、3間（5m40cm）道路と小学校」と村人にうたわれたそうです。

こうして、昭和の初めになって現在の第七小学校の母体が出来上がるのですが、昭和19（1944）年の8月に児童数が一気に膨れ上がります。それは、品川区の芳水小学校の児童の集団疎開を受け入れたためでした。芳水小学校の子どもたちは、親元を離れて地域の寺などに寄宿し、慣れぬ土地での勉強や生活は大変だったのではないのでしょうか。（この時の様子を知っている方はまだ大勢いらっしゃると思います）

時は戦後となり、小曾木村も昭和30年に青梅市と合併します。そして、同37年には、足の便も確保できたということで、東西の両分校が廃止されます。さらに昭和48年から鉄筋コンクリートの新校舎の建設が始まり、名実ともに現在の第七小学校と同じになるのは翌49年2月末のことです。

以上が青梅市立第七小学校の概説ですが、現在、第七小学校の児童数は、極端に少なくなっている現状があり、最大の課題でもあります。全校児童数98名で、なんと1年生に限っては9名と初めて10名を切ってしまったとのことです。今の30代40代の保護者の世代の方々の時は、学年2クラスあり、5～60名くらいはいたと思いますが、1年生が一桁ということを知って筆者も驚きを禁じえませんでした。

稿の最後になりましたが、ぜひ児童数が増えてほしいものだと思います。

参考文献：青梅市史、小曾木近代史、七小PTA記念誌

起稿に際しまして、第七小学校前副校長の古川恵一郎先生には多大なるご指導を戴きましたことを申し添えます。

（文責 神森正）